

四代目澤村田之助の墓について

市川祥子

# 四代目澤村田之助の墓について

市川祥子

## はじめに

六代目澤村田之助『澤村田之助むかし語り―回想の昭和歌舞伎―』<sup>1</sup>（以降『むかし語り』と略す）には、四代目澤村田之助の墓について以下のようにある。

百之助、この名前は四代目田之助の幼名です。三代目田之助が明治十一年に亡くなり、その三年後に三代目の兄の助高屋高助（四代目）がバックアップして、百之助が四代目を襲名しました。四代目は明治三十二年に四十二歳の若さで亡くなりました。群馬県新田郡世良田村大字上矢島の常蓮寺に葬られたのを、歌舞伎の大道具にいた方から、田之助さんご存知ですかと言われ、旅先で死んだと聞いてはいるけれどお墓がどこにあるか知らないから、巡業に行った時に連れて行ってくれと頼み、機会を得て常蓮寺にあるお墓へお参りしました。この百之助は九代目（團十郎）さんの大歌舞伎にも出ています。常蓮寺から分骨はせず、田之助の代々のお墓には入っていません。

『むかし語り』は、『演劇界』に連載された六代目からの聞き書きを整理して一冊としたものである。今では氏の記憶のみに留められた事柄も多く、近代の歌舞伎を知る上での貴重な資料となっている。この度これにより、四代目の墓が群馬県内にあることを知り調査を試みた。

四代目澤村田之助の墓は境町上矢島の浄蓮寺（群馬県伊勢崎市境町大字上矢島四五五）の墓所にある。『むかし語り』に「常蓮寺」とあるのは誤植であろう。また「新田郡世良田村大字上矢島」とある点にも注意しておきたい。現在の境町の地域は昭和三〇年（一九五五）にそれまでの境町、采女村、剛志村、島村が合併し佐波郡境町として発足した。その後平成一七年（二〇〇五）に伊勢崎市と合併している。ただし、上矢島は昭和三二年（一九五七）に佐波郡境町に編入された地域であり、それ以前は隣村、新田郡世良田村に属していた。六代目は巡業時に墓参したという日付を示していないが、「新田郡世良田村大字上矢島」が記憶され、また訪れられたのもこの時期と推測できる。境町は、朝廷の使節が京都から日光へ通うために整備された例幣使街道の宿場であり、江戸から明治にかけて宿場町として、また利根川が近いために生糸、絹織物の集積地として繁栄を誇った。<sup>2</sup> 浄蓮寺の墓については、浄蓮寺発行の『浄蓮寺』史話<sup>3</sup>に以下の紹介がある。

## ○三代目沢村田之助の墓

明治二、三十年代になると、旅役者による芝居が盛んになり、境町でも三島屋興行社による芝居の興行がたびたび行われた。上矢島の住民は特に芝居が好きで、現在でもその時に使われた幕が

残っている。特に浄蓮寺の境内は広がったので、ここにいくたびとなく小屋が建てられ、芝居が行われていた。また、地元にも勧進元の組織（芝居などの興行主組織）が作られていた。

浄蓮寺境内には、歌舞伎役者の三代目沢村田之助の墓がある。田之助は上矢島に招かれて芝居を行ったが、風邪がもとで病気になる、浄蓮寺の隣りの家で亡くなったという。墓石には明治三十二年四月四日、行年四二歳で没したと記されている。この墓は同三十四年一月に、地元の人や勧進元歌舞伎俳優興行社らによって建立されたもので、徳蔵寺住職を中心に、盛大な供養が行われた。また、その後も時々俳優が線香をあげ、墓参りに訪れていたという。

なお、田之助は当地へ置き土産として「白浪五人男」の芝居を残した。この芝居は近年まで、上矢島の芝居愛好者の会の得意芸になっていた。今でも七〇歳くらいの人までなら演じることができるといふ。また、かつては他村の演芸会などにも頼まれて上演したことがあるという。

また、『境町の文化財ガイド』<sup>③</sup>には以下の紹介がある。

澤村田之助の墓標／上矢島／江戸時代後半から明治にかけて、地方の歌舞伎興業は活況があった。境町でも専門の役者を招く「買い芝居」が盛んに興されていた。歌舞伎役者4代目澤村田之助は公演先で亡くなり、地元境周辺の勧進元などが浄蓮寺に供養した。

墓の裏面には「明治三十二年四月四日死行年四十二」とあるので、これが、明治十一年（一八七八）に没した三代目ではなく、四代目のものであるのは間違いない。それでも『浄蓮寺』史話<sup>④</sup>が「三代目」とするのは、現在、正面上部の鉄菊の紋の脇に「三代目」と彫られているためである。これについて、平成八年（一九九六）の『浄蓮寺』史話<sup>④</sup>より先、昭和四四年（一九六九）のしの木弘明『境風土記』に

は「○浄蓮寺（上矢島）「略」墓域に二代沢村田之助の墓碑がある」とある。『境風土記』が「二代」とした理由はわからないが、ここから、当時墓には何代目かを明示するものが彫られていなかったことが推測できる。一方、次に引用する昭和五〇年（一九七五）の「浄蓮寺の田



【図1】 浄蓮寺・澤村田之助之墓

之助墓碑」には「三代目としてある」とあるので、両者の間にこれが彫られた可能性が高い。

墓の存在、詳細については、齋藤進一「浄蓮寺の田之助墓碑」<sup>5)</sup>に調査報告がある。これは齋藤があらためて記した「歌舞伎俳優四世沢村田之助について」<sup>6)</sup>に引用されており、資料としては後者が新しいのでそちらを用いて以下に示す。

境町上矢島の西方に地元の人が西の寺とよんでいる真義<sup>7)</sup>真言宗喜離久山浄蓮寺があり、墓域に歌舞伎役者沢村田之助の墓碑が立っている。

墓の正面に定紋、その隣に三代目、下に沢村田之助之墓。裏面に明治三十二年四月四日死、行年四十二、同三十四年一月建立。その下に細字で、東京新富町北原<sup>8)</sup>・東京今戸沢村<sup>9)</sup>升、沢村<sup>10)</sup>訥子、沢村源之助・沢村宗十郎・沢村由蔵・沢村菊次等の紀伊国屋一門と、その他の歌舞伎俳優の名前が刻つてある。墓には三代目としてあるが、現在では没年から紀伊国屋家系その他によると、四代目田之助としている。

これを参考にしつつ墓【図1】の詳細をまとめておきたい。

墓石は高さ二mを超す大きなもの。近年新しく立派な墓が増えてきた浄蓮寺の墓地の中でも、前面道路の近くに威容を誇っている。

墓の正面には、中央に澤村家の紋、鉄菊をいただいて「澤村田之助之墓」、紋の向かつて右側にそれよりは小さな文字で「三代目」、台座には「俳優」と刻まれている。

墓の裏面には、上部に「明治三十二年四月四日死行年四十二」「明治三十四年一月建之」と並び、下部に歌舞伎俳優の名が刻まれている。現在この部分は石の風化によって読み取りにくい状態にある。四段にわたって刻まれた名は五十名ほど。一段目には「東京橋区新富町」

とあって「紀ノ清北原ゆく」、続いて「東京今戸澤村訥子」「澤村訥子」「澤村源之助」「澤村宇十郎」「澤村由蔵」「澤村菊次」と並ぶ。「浄蓮寺の田之助墓碑」は「澤村宇十郎」を「澤村宗十郎」としているが、「澤村宗十郎」の名は嘉永元年（一八四八）に五代目宗十郎が長十郎と改名して後、明治十九年（一八八六）に没した六代目（＝四代目助高屋高助、実際には名乗っていない）を経て、明治四一年（一九〇八）に裏面に名のある訥升（四代目高助の養子）が七代目を襲名するまで空白であり、明治三四年（一九〇一）の時点では該当者がいない。当時訥子訥升の近くで活躍していた「澤村宇十郎」とすべきであろう。台座には「當時勸進元」とあって地元の名が二段にわたって刻まれている。「羽鳥岩蔵」「羽鳥岩吉」「高室義信」「羽鳥近三」「田代源次郎」「藤村長次郎」「藤村陸次郎」「藤村吸次郎」「新井浦次郎」「新井多之助」等の名がある。

## 二

四代目澤村田之助の墓が境町上矢島にある理由については「浄蓮寺の田之助墓碑」は以下のように考察している。同じく「歌舞伎俳優四世沢村田之助について」を用いて示す。

なぜ浄蓮寺に田之助の墓が建立されたのかについては、上矢島の人々の人情話のこつている。以下は地元の羽鳥岩蔵さんから聞いたものである。明治三十二年四月三日の春祭りに上矢島有志の計らいによって歌舞伎興行を行なうことになった。一日から三日間、西の寺浄蓮寺境内に於いての紀伊国屋沢村田之助一座による田舎興行で、興行元は境萩原の三島屋である。最後の三日目の狂言の切りは、「奥州安達原」三段目袖萩祭文の場で、田之助は袖萩役を演じ、子役の彦ちゃんという十二・三歳位の子供と共演した。全興行も無事終えた田之助は、その夜宿になっていた羽鳥品蔵氏

宅（現在の羽鳥岩蔵氏宅）に帰り、その夜は何の変わったこともなく休んだ。翌朝のことである。田之助は身体に急変を来し、八方手を尽くしたがついにその甲斐もなく羽鳥氏の離れ屋十畳間において病没したのであった。四十二歳であった。その二年後に村内有志の人々によって浄財が募られ、村民の同情によって明治三十四年一月、墓碑が建立されたのである。そしてそれ以降、今日に至るもおお盆やお彼岸になると上矢島の人々の墓参を受けているという。

地元では、浄蓮寺で澤村田之助一座の興行があり、四代目は近隣の民家を宿としたが急病のため没し、それを弔うため二年後に墓が建てられた、と伝えられているとのことである。

上矢島での歌舞伎の興行について、『境町史 第2巻 民俗編』<sup>[1]</sup>には「上矢島の道化芝居」として以下のようにある。

上矢島では、大正の頃に、同好者が演芸部のようなグループを作り、盛んに芝居をやっていたという。道化芝居とも呼ばれているが普通の芝居も演じ、「白浪五人男」が十八番（得意芸）であったという。多くは秋祭りの頃に、浄蓮寺の境内に小屋掛けをして演じた。長さ八間くらいの幕もあった。また、あちこちからも頼まれて上演した。木札を腰に下げていたというから、興行許可の鑑札を受けていたのであろう。また、上矢島の者は小屋掛けがうまいので、よく他村からも頼まれたという。

群馬、埼玉といった北関東のこの一帯は、素人によるならい芝居、地元の役者による地芝居、中央、地方の有名な役者を呼んだ買い芝居のいずれにも熱心な土地柄であった。浄蓮寺の境内では歌舞伎の興行が盛んに行われ、四代目も到来し、その折に土地の素人芝居に本場の「白浪五人男」が伝授され、十八番として長く演じられ続けたと推測

することは容易い。

さて、「歌舞伎俳優四世沢村田之助について」は、かつて六代目に、四代目が「高崎の在で死んで、そこには畳一敷くらいのお墓があります。僕は巡業で訪ねて驚きました。お寺ではなく、周りが田圃のところには大きな墓石が建っていたんです」との発言があることを受けて、墓の所在が浄蓮寺であることを示すとともに、これまでの資料を検討し、「明治三二年四月四日上州谷村の旅舎で病没した」（『日本人名大事典』）、「三二年上州国谷村の旅舎で死去」（『芸能人物事典』）、「明治三二年四月三日群馬県谷村の旅舎で病死」（『演劇百科大事典』）、「明治三二年四月三日」「上州国谷村に遠逝す」（『歌舞伎年代記』）のように、没した場所が境町とはされず、また「谷村」「国谷村」の二通りがあることを指摘している。ここで検討された資料はいずれも大正一一年（一九二二）発行の田村成義『続続歌舞伎年代記乾巻』<sup>[2]</sup>に依拠したものと考えられる。同書の記事「四月三日沢村田之助死す」には以下のようにある。

廿五歳にて四代目田之助を襲名し市村座に於いて立お山とまで昇進せしが後病身となりて都下の劇場へは出勤なく久しく旅廻りをして殆ど消息を絶ち居りしが本年上州辺を巡業し去る三月末より病勢革まり薬石効を失し同国谷村の旅舎に在て遠逝したり

ここにある「上州辺」「同国谷村」に依って「谷村」「国谷村」とされてきたのであろう。しかし、明治期の群馬県には「谷村」「国谷村」とも存在しない。

没した場所について明治三二年（一八九九）四月八日の「朝日新聞」には以下の記事がある。

●沢村田之助死す 同優ハ先年より地方興行を専らとし田舎俳優の上置となりて興行し廻り去る一日より八埼玉県児玉郡丹庄

村元阿保村の劇場緑座に於て同地の俳優を対手とし「染分手綱」の重の井「熊谷陣屋」の相模などを勤め居り狂言ハ一日代りにて夜芝居なれば去る三日ハ寺子屋を出さんとし午前九時より稽古に着手せしに突然脳卒中を発して卒倒し人事不省となりたるより座員関係者の驚き一方ならず興行主なる上毛境矢島の松本文五郎ハ田之助の宅なる京橋区新富町六丁目新富座附茶屋紀の清へ急報し同家の者を呼迎へ息ある内に面会せしめんとせしに間に合はず同日午後四時三十分といふに溘焉として死亡せり今田之助の略歴を聞くに同人は浅草猿若町三丁目にありし守田座附茶屋紀の国屋梅沢清吉の次男にて幼名を百之助といひ故人訥升即ち助高屋の縁類なるを以て其門に入り沢村百之助と称し市川九蔵即ち今の団蔵が夏祭を勤めし時十歳にて子役となり初舞台を勤め後師の訥升菫萱を勤めし時石童丸を勤めて好評あり今より十八年前故人田之助の養子となりて其名を襲ぎしに性来の大酒ハ終に其身を虚弱ならしめ府下の各座へ出勤する事叶はず止むなく旅興行を専らとせしものにて近來ハ病氣も大いに回復したれば是非とも東京にて演じ度しといひ居りしに厄年とハいへ四十二歳を一期として果てたるハ氣の毒なり遺骸ハ一昨日新富座附茶屋紀の清へ着し同座打上を待つて浅草松葉町誓願寺へ送葬すといふ

これによれば四代目が没したのは「埼玉県児玉郡丹庄村元阿保」、「緑座」での興行中であり、巡業の興行主は「上毛境矢島の松本文五郎」であった。「丹庄」は一般に丹荘と表記される。

明治期の元阿保について、『神川町誌』第七章 芸能、神事 第二節 演芸、娯楽「(一) 地芝居について」には以下のようにある。

又、古老の話に、古老の祖父達が若い頃、明治の初期よりならい芝居が盛んに行なわれていたとの話をよく聞かされていたとのこと。

このような風土の中で、素質もあり、修業をつみ、遂に役者となり更に一座をつくり座長となつた人に松本伊三郎がいる。伊三郎は芸名を扇雀と称し、父は松本文五郎（天保一年九月十五日生）、母は松本アサ（弘化三年三月四日生）といい、この長男として慶応元年九月一七日に本町元阿保二〇番地に生れた。明治初期の文明開化、四民平等、文化と庶民解放の風潮の中、地元の盛んな芝居熱にのり、遂に役者として身をたて一家をきずいたのである。

伊三郎は座長として一座を組織し、地元周辺をはじめ関東一円は勿論、遠く長野県まで巡業し名声を博し、本町にも時々帰つて興業した。一座の規模は二〇余名、出し物は客の好みに合わせて色々したが、特に千代萩、大功記等より上演した。しかし惜しくも病を得、療養の甲斐なく大正四年一月一三日、五二才の若さで生地で死亡した。伊三郎には実子が無く、後継者も無かったので一座も解散し、生家も昭和初期まであったが、家も屋敷も人手に渡り、関係者の消息は詳でない。曾て川西に太夫もと（たいふもと）と言って大きな家があったが、これが伊三郎の生家であった。

元阿保は伊三郎を生んだ土地柄で、地芝居が盛んに行なわれていた。まわり舞台のある、間口一二間（約二二メートル）の大きな地区共有の芝居小屋があったが、明治四五年一月七日の大火で焼失してしまった。これにより、衣裳、大道具、台本、諸記録簿等、何も残っていない。この芝居小屋のあった場所は旧二五四号道路側の梨出荷所の所である。

さらに買い芝居の盛んぶりを示す部分には以下のようにある。

このような買芝居は各地で催されたもので、渡瀬では、東京か

ら一流の歌舞伎役者である守田勘弥一座を招き、数日に亘り興行したとか、植竹では大正八年頃、この周辺では有名な越後千両という一座を招き、群馬の神田より大きな掛舞台を借り、役者は民家に分宿して、親類縁者が泊り込みで見に来て盛会な芝居があったこと等、これ等は一例にすぎない。

丹荘村元阿保は旧国道二五四号、いわゆる鎌倉街道沿いの大きな集落である。明治期、その中心地には立派な常設の芝居小屋があり、ここでは地芝居の松本伊三郎（扇雀）の一座が興行をし買い芝居も頻繁であった。名の挙がる守田勘弥も、一座がしばしば旅まわりに出たことを考えれば、近くで実際に興行を行った可能性が高い。梨出荷所は元阿保交叉点から北に八〇mほどにあり、現在では広い平らな土地に丹荘梨果出荷組合のプレハブの建物が建っている。

そして『神川町誌』にある伊三郎の父「松本文五郎」の名は、「朝日新聞」記事にある興行主「松本文五郎」と同じである。同じ人物と考えてよいだろう。ちなみに、元阿保交叉点西南角には明治三〇年（一八九七）一月建立、海軍中将安保清康撰・篆による「征清凱旋之碑」があるが、そこに刻まれた寄進者の中に松本文五郎の名を見ることができる。

これらから「朝日新聞」記事にある、四代目と共演した「同地の俳優」に松本伊三郎一座を想定できるのではないだろうか。そして、記事が信頼に足るのならば、四代目は興行中にこの地で没したのではないだろうか。

ただし松本文五郎がこの人物だとすれば、記事に「上毛境矢島の」とあることと齟齬を来す。「境矢島」は浄蓮寺の所在地である。丹荘は武州・埼玉県、境町は上州・群馬県であるが、利根川をはさんでその間は約十二km。中山道の宿場町本庄を通って両者をつなぐ道もあり、興行を同じ者が取り仕切ることに違和感はない。例えば、四代目の一座は上矢島から元阿保へと巡業を進めていったのではないか。記事は

それを混同して松本文五郎を「上毛境矢島の」としたのではないだろうか。

また、埋葬について「朝日新聞」記事は「遺骸ハ一昨日新富座附茶屋紀の清へ着し」「浅草松葉町誓願寺へ送葬」の予定としている。一方『むかし語り』には、「田之助の代々のお墓には入っていません」とあった。

三代目の墓は練馬の田島山十一ヶ寺の一つ受用院にある。田島山十一ヶ寺は、浅草田島町にあつて信仰を集めた誓願寺の十一の塔頭が、大正一二年（一九二三）の関東大震災による焼失の後、昭和三年（一九二八）に現在の場所に移転したものである。澤村宗十郎の墓がその墓所にあり、下方には黒く煤の跡があつて震災の折に火をかぶつたものと推測できる。『むかし語り』に「田之助の代々のお墓」とあるのはこれを指している。

墓の正面には、三代目の戒名「深広院照普盛居士」、二人おいてその横には兄・四代目助高屋高助の「高德院賀光仙寿居士」、三代目の下には実子・二代目澤村由次郎の「孝順院澤普縁由居士」が、また、墓の側面には「深 明治十一年七月七日」「高 明治十九年二月二日」「孝 明治廿三年二月十九日」とそれぞれの戒名の最初の一字と命日とが刻まれている。そして、正面の三代目の下段には四代目の戒名「慈田院沢盛枝芸居士」、側面には命日「慈 明治三十二年四月三日」がある。命日は浄蓮寺の墓とは異なっている。他に埋葬された後四代目の名が刻まれたのかもしれない。ちなみに、四代目の後には一人があるのみ。しばらく途絶えた田之助の名は、大正九年（一九二〇）に五代目（七代目澤村宗十郎の次男）が襲名し、昭和三十九年（一九六四）に六代目に譲られるが、五代目は受用院に別に葬られている。

## 三

四代目澤村田之助は守田座付の芝居茶屋紀ノ清の子、前名は百之助。三代目に入門し後に養子となった。芸はもちろん、美貌と色気で熱狂的な信者を集め、手足を失っても執念で舞台に立ち続けた三代目は明治十一年（一八七八）七月に亡くなる。岡本起泉『澤村田之助曙草子』の刊行は明治十三年（一八八〇）。没後三年を経た明治十四年（一八八一）一月、四代目は田之助を襲名する。市村座において「明烏廓初雪」で三代目の当たり役浦里を勤め、助高屋高助の立女形に据わったのである。三月には同座で襲名の披露として「弓張月源家鏑箭」【図2】の白縫姫、寧王女を勤める。五月には同座で「盛紫好比翼新形」【図3】の二代目盛紫を勤める。これは前年吉原品川楼で起こった娼妓盛紫の心中と、名を継いだ二代目盛紫が先代追善のために阿弥陀の襦袢で売り出したという新聞ダネを芝居に仕立てたもので、四代目の襲名にちなんだ演目であったろう。六月は本所相生町に新築なった寿座に助高屋一門として出勤。このように、入り不入りはともかく、四代目の出勤は一門が盛り立てる華やかなものであり、「むかし語り」に「三代目の兄の助高屋高助（四代目）がバックアップして」とあるのはこうした事情を指しているよう。

この後明治十五年（一八八二）から一七年（一八八四）には高助とともに九代目市川團十郎の一座に加わり市村座、猿若座、新富座に、また、市川右団次、市川権十郎の一座に加わり春木座に出勤。その間には上州への巡業も記録されている。高助が團十郎の相手役を勤める中、田之助もその脇で舞台に立っている【図4】。また、明治十八年（一八八五）には團十郎の一座で千歳座の初興行に出勤。「むかし語り」に「この百之助は九代目（團十郎）さんの大歌舞伎にも出ています」とあるのはこの頃を指しているよう。また、寿座桐座にも出勤している。明治十九年（一八八六）に高助が没し、一門は高助の娘（養女）婿で



【図2】 明治十四年3月 市村座「弓張月源家鏑箭」 阿曾忠国 片岡我童、八郎為朝 助高屋高助、白縫姫 沢村田之助、八丁礮喜平治 中村時蔵



ある七代目澤村訥子、高助の養子である四代目澤村源平（二六年に訥子襲名）を中心に進むことになる。明治二〇年（一八八七）一月には浅草公園に吾妻座が開場。花道のない緞帳芝居の小屋ながら一門はここを本拠地として盛況を得、明治二年（一八八八）には高助、三代目の追善興行も行っている。明治二三年（一八九〇）には一門が千歳座へ。ここでも四代目の美しさは評判となるが、小屋は五月に焼失。訥子、源平は大阪朝日座へ下り、翌年まで大阪を中心に活動する。四代目は翌年六月の三崎座開場に出勤している。

明治二五年（一八九二）四月、訥子は浅草に澤村座を開く。かつて、明治六年（一八七三）、三代目は京橋南鞆町に澤村座を開いたが一年足らずで手放さざるを得なかった。小屋を持つことは一門の悲願であったろう。開場は「好訥子評判長町」と訥子の名を織り込んだ演目で四代目も出勤。五月には「籠釣瓶花街酔醒」の八ッ橋などを勤めるが、九月の上演には出勤しておらず、小屋も座主と揉めて一門の手から離れている。その後、四代目の名は東京の上演の記録には見られなくなる。『統統歌舞伎年代記乾巻』に「都下の劇場へは出勤なく久しく旅廻りをして殆ど消息を絶ち居りし」、「朝日新聞」記事に「地方興行を専らとし田舎俳優の上置となりて興行し廻り」とあるのはこの頃を指しているよう。

さて、明治三十一年（一八九八）二月、明治座では市川左團次が一座に訥子を加え、高助十三回忌追善として「碁太平記白石噺」を掛けるが、むろんそこに四代目の名はない。この年一門は宮戸座に出勤。小芝居ながら訥子、訥升到市村家橘（三六年に羽左衛門襲名）を加えて人気を集める。ここで立女形に据わったのは、三代目の田之太夫に対し田甫太夫と呼ばれる四代目澤村源之助であった。源之助は出発期から三代目に憧れ、教えを受けて芸を受け継ぐことを自負する<sup>16</sup>、自他共に認める後継者である。数年の大阪暮らしから戻ったこの時期には、三代目の後継の意識が強く現れている。四月には三代目に教わった通り<sup>17</sup>という浦里を、七月には東京座「百物語沢辺螢火」で芸者小さん



【図3】明治14年5月 市村座「盛紫好比翼新形」二代目盛紫 沢村田之助、品川楼盛紫 助高屋高助、八木豊永 片岡我童、栃木荘吉 助高屋高助



【図4】 明治17年2月 新富座「後風土記劇本読」 しがらみ 助高屋高助、小宮山又七郎 尾上菊五郎、小宮山内膳 市川團十郎、さざなみ 沢村田之助、秋山民部 助高屋高助

実は姫妃のお百、踊りの師匠沢村田の字を勤めている。

そして、明治三二年（一八九九）四月に四代目は没した。田之助の名が四代目から離れるのを待っていたわけでもないだろうが、明治三年（一九〇〇）一月には宮戸座で、かつて三代目のために書かれた「姫妃のお百」を源之助が演じ、翌月には「俠客相模屋政五郎」が掛かる。これについて一月末の「朝日新聞」「楽屋すずめ」には以下のようにある。

宮戸座二月狂言ハ一番目新作「穴守神社の由来」六幕二番目新作「俠客相模屋政五郎」六幕にて此二番目たる相政の娘ハ亡沢村田之助の未亡人にて目下浅草橋場町に住し居るより沢村家一門の者が此座に集まりて演ずる事になりしなりと

三代目の夫人は俠客として鳴らした相模屋政五郎の娘。三代目と関係の深い相政を扱い、劇中劇を挟み込めばその姿を舞台に載せることもできる。かつての圧倒的な人気にあやかって田之助という名の権威を取り戻し、紀伊國屋一門の存在感を高めようとの意図が窺える。七月の宮戸座は「芳原心中新比翼塚」。四代目襲名時の「盛紫好比翼新形」と同じ心中を扱い、伊原青々園が新たに書きおろしたものの。ここで盛紫を演じたのは源之助である。

#### 四

刊行間もない『むかし語り』を読み、世良田の町内を探しなどしながら、境町上矢島浄蓮寺の澤村田之助の墓にたどり着いた時、驚いたのはその立派さであった。

四代目の晩年について以下のように想像してみることができよう。幾人もいなかったであろう一座と共に北関東を巡業中、境町上矢島で興行をし、民家に泊まり歓待されつつ、地元の素人役者連にも芝居の

手ほどきをした。続いて丹莊村元阿保に移り松本伊三郎一座と興行を行う内、病のためその地で没した。遺骸は東京に戻されたのか、元阿保や浄蓮寺に埋葬されたのか。東京では葬儀が行われその名は浅草誓願寺受用院の代々の澤村宗十郎の墓に刻まれた。一方、四代目とともに舞台に立った上矢島の人々は故人を偲び、折からその死を受けて三代目を担ぎ出し、一門の隆盛を計っていた縁の俳優にも働きかけて、二年後に浄蓮寺にも墓を建てた。

もちろん、一度は東京の大芝居で喝采を浴びた歌舞伎俳優が、そこに戻ることを切望しつつ旅まわりの内に没した、まして、三代目という大俳優の、跡を継いだ自分が居て然るべき位置に他の役者が立ち好評を博しているのを伝え聞きつつ、というのなんとも痛ましい。しかし、傷心の旅まわりにあっても、四代目を師と慕う素人役者との交流があり、彼らがその無念を思い、恩に報い出合いを後世に残そうと堂々たる墓を建てたことには、わずかながらも慰められる。浄蓮寺の墓は、四代目澤村田之助の生涯の標として、また、歌舞伎俳優と当時大変な芝居熱を誇っていた地元の人々との交流の標として、記憶されるべきものであろう。

## 注

- (1) 澤村田之助『澤村田之助むかし語り―回想の昭和歌舞伎―』(雄山閣、二〇一・一一・二〇)  
 (2) 『浄蓮寺』史話(改定版)(浄蓮寺、浄蓮寺檀徒総代一同編集、一九九六・一〇・二二)  
 (3) 『境町の文化財ガイド』(境町教育委員会、一九九・三・二五)  
 (4) 『しの木弘明』境風土記(境町地方史研究会、一九六九・八・三〇)  
 (5) 齋藤進一「浄蓮寺の田之助墓碑」(群馬歴史散歩)第九号、群馬歴史散歩の会、一九七五・三・一五)  
 (6) 齋藤進一「歌舞伎俳優四世沢村田之助について」(伊勢崎市境歴史資料)第二三四号、伊勢崎市境史談会、二〇〇七・一二・二一)  
 (7) 「浄蓮寺の田之助墓碑」によって「真義」を補った。  
 (8) 「浄蓮寺の田之助墓碑」と現在読み得る範囲を考慮して(い)を

(ゆ)に改めた。

- (9) 「浄蓮寺の田之助墓碑」によって(納)を(訥)に改めた。  
 (10) 「浄蓮寺の田之助墓碑」によって(納)を(訥)に改めた。  
 (11) 『境町史 第二巻 民俗編』(境町、一九九五・一〇・四)  
 (12) 『歌舞伎はともだち3 三代目澤村田之助』(ペヨトル工房、一九九六・三・一五)  
 (13) 田村成義『続続歌舞伎年代記乾巻』(市村座、一九二・一一・八)  
 (14) 「沢村田之助死す」(朝日新聞)(東京、朝刊第五面、一八九九・四・八)  
 (15) 『神川町誌』(神川町・神川町教育委員会、一九八九・三・二〇)  
 (16) 澤村源之助「青岳夜話」には、三代目田之助との関係について、「私が始めて田之太夫に教はつたのは明治六年十月の澤村座です。此の座は中橋の鞆町にあつて、田之太夫の養子澤村百之助が座主と成つて、澤村家全体の興行をしてゐました」、「その時私は十四歳で、人様より柄も大きい方ですから禿には無論不向きですが、それも足の無い田之太夫を介抱しながら芝居をさせる必要から特に私を探させたのです」、「それにあの濃艶な目付、凛々としたあの調子に、見物は全く恍惚とさせられてしまふのです。傍について居る私達できへ、時としては其の動作に魅せられ、我を忘れる事が往々ありました」と、また、浦里について、「私が今日演つて居るのは、すべて先の澤村田之助さんに教はつた通りですが」とある。「青岳夜話」の引用は佐藤鶴子『澤村源之助』(光風社書店、一九七四・四・三〇)に収録された木村富子『花影流水』による。  
 (17) 四代目澤村源之助の芸を受け継いだ三代目尾上多賀之丞は、インタビューで「田甫さんがたいへんに崇拜していたんですね、田之助を。つまり、わたしが田甫さんを崇拜していたように、なんでもあれでなきやいけないというふうにと語っている。『青岳夜話』と四世源之助』(『伝統と現代』第十一巻、伝統芸術の会、学芸書林、一九七〇・一・二五)、『むかし語り』は、六代目が多賀之丞に役を教わったことにも触れているが、そうして多賀之丞が六代目に伝えたことで、三代目の芸は田之助の名の元に帰ったことになる。その伝承に四代目の関与はない。  
 (18) 「築屋すゞめ」(朝日新聞)(東京、朝刊第四面、一九〇〇・一・三〇)